

近世における『蜻蛉日記』注釈・享受についての研究

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世における『蜻蛉日記』研究について、『かげろふの日記解環』・『蜻蛉日記草稿』・『蜻蛉日記紀行解』の三つの注釈書と『蜻蛉日記』の板本を対象に、それぞれの内容を精査することによって、個々の成立や相互の影響関係について考察したものである。

『蜻蛉日記』は平安時代中期に成立した作品であるが、最善本とされる宮内庁書陵部所蔵桂宮本を始め、その他の古本系諸伝本の中にも、近世を遡る写本は一本もない。その結果、現存する『蜻蛉日記』諸本には、元禄十年(1697)以降何度か刊行された板本をも含めて、転写の間に被った本文の欠陥および誤字・脱字が夥しく存在することとなり、多くの研究者の関心は、書体転訛を推測批判することによる本文原型の復元へと向けられてきた。そのような研究の嚆矢としては、契沖の手になる注稿本(元禄九年、1696)が知られるが、現存しない。

第一章では、近世における『蜻蛉日記』の本文研究に多大な寄与をした板本について、その成立と刊行事情を中心に先行研究を確認し、本文としては元禄十年(1697)刊本・宝暦六年(1756)刊本(A)と同(B)・文政元年(1818)刊本の二種に分類できること、それら板本に研究者たちが契沖の本文改訂案を写し、さらに契沖説の発展・批判や自説を書き入れていく形で本文研究が進んでいったことを跡づけた。

第二章では、独立した注釈書として初めて刊行された坂徴著『かげろふの日記解環』(天明五年、1785)が依拠した本文について検討した。すなわち、凡例に八冊本の板本をもとに契沖校本の転写本三本の書入れ本を参照した旨を記しているため、従来『解環』の日記本文は元禄十年刊本に依拠していると言われてきた。しかし、『解環』に見える468例もの「原本」についての言及箇所を板本の本文と逐一比較してみると、一致しない箇所が少なからず確認できた。その違いについて本論文では、板本への書入れを本文に採用した結果であろうと推測するが、具体的にどのような書入れ板本に依ったものであるかは、今後の調査検討によって解明されることが期待される。

第三章では、萩原宗固・山岡浚明・塙保己一・横田袋翁・屋代弘賢などの注が記載されている『蜻蛉日記草稿』(大東急記念文庫及び正宗文庫に分蔵)という注釈稿について検討した。従来『草稿』の成立は、萩原宗固の没年(1784)との関係で、『かげろふの日記解環』の刊行(1785)より先行するとされてきた。しかし、『草稿』の本文および頭注・傍注と『解環』とを比較した結果、『草稿』は『解環』を参照していることが明らかになった。したがって『草稿』は、萩原宗固の弟子筋にあたる塙保己一・横田袋翁・屋代弘賢の誰かによって、『解環』が刊行された天明五年以降、『草稿』に関する記事の見える高田与清著『擁書漫筆』が刊行された文化十三年(1816)以前に成立したものであると結論づけた。

第四章では、田中大秀著『蜻蛉日記紀行解』(文政十三年、1830)の依拠本文について、板本との詳細な比較の結果、元禄十年刊本に拠っていると従来の説を覆し、宝暦六年刊本(B)もしくは文政元年刊本に拠っていることを明らかにした。

以上、本論文は、近世における『蜻蛉日記』研究が、板本の刊行と密接に関係しながら展開していることを、関連資料の精緻な検討に基づき具体的・実証的に解明したものであり、『蜻蛉日記』研究の出発点がいかなるものであったかを再確認させる貴重な成果である。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。